



会員 有本 真由

初めての民事尋問

はじめに

この9月で弁護士2年目となる。この間、本当に様々な方にお世話になり感謝しきれない。色々なことを経験させていただき、それぞれに思い出があるが、ここでは初めての民事尋問について話そうと思う。

初めての尋問

私は幸運なことに、初めての民事尋問から3回目までをほぼ1週間に1度のペースで立て続けに経験した。弁護士登録からほど良い期間を経ており、極めて有益だった。

最初は主尋問を担当した。準備は前々日までに終えていたが、前日に保全事件が入り事務所で徹夜した。普段は平気だがその日に限ってなぜか体調を崩した。事務員さんによると、法廷へ出かける際、顔面蒼白だったらしい。私自身は、昔から本番には滅法強く体調で左右されたことはないため大して気にしてなかったものの、周りからはかなり心配された。ボスも必要なら私の代わりに休廷を申し出るとおっしゃっていた。

刑事事件をそれなりに経験していたおかげか尋問に支障の出るような緊張はしなかった。対象者の回答にあわせ、用意した質問を多少臨機応変に変えることもできた。そして休廷を申し出ることなく無事終了。ただそれ以降、尋問のたびに私の体調を気遣うという事務所の恒例ができてしまった。

反省点

本誌5月号及び7月号掲載の「民事裁判における効果的な証尋問」という記事には随分お世話になった。初めての尋問で、陳述書に書きすぎると証言の迫真性や信憑性が減殺されないかという問題にぶつかっていたが、この記事を読み、今後の方針をある程度定めることができた。

反省点は多々ある。主尋問なのに反対尋問に対する補強にばかり気をとられ、こちらの主張の裏づけが甘いこともあった。反対尋問で議論になってしまった場面もあった。これら弱い点は全てボスが再主尋問などの形で補ってください。

他方で、反対尋問で敵性証人にギロリと睨み付けられてもたじろぎもしない自分に、自分自身強くなったと思えることもあった。

最も苦痛を伴う作業は、最終準備書面や控訴理由書の作成である。尋問調書を読むたび、穴があったら入りたい気分になる。この恥ずかしさを次に活かすことができればと思う。

尋問後

尋問が終わった後はそれなりにやり遂げた感がある。テンションが上がって振り切れるため、その日は事務的作業のほか仕事が手につかない。そのくせ時間の経過とともに、脳内ダメ出しが始まり、電車内にもかかわらず思わず「ああ」などと声を上げてしまうほど苦い思いをする。なので、尋問の日はさっさと仕事を切り上げて飲みに行くに限る。良い飲み友達の確保も仕事のうちである。

とはいえこの感情の激しい起伏がわりと好きだったりもする。

今後に向けて

主尋問については3回目でボスから合格をいただいた。これがまぐれ当たりにならぬよう気を引き締めていきたい。反対尋問については模索中である。ボスのように証人と会話をするように質問を重ね、必要な情報を引き出せるようになればと思っている。

これからも精進し早く尋問で独り立ちできるようにしたいものである。